

2 実践者から実践者への インタビュー

小さい子を持つお母さんが3代続けて拠点の常駐スタッフに

安佐南区 安学区社協 活動拠点（安ふれあいセンター）

インタビュー 古田地区社協（西区） 丸山事務局長、森重地域福祉推進委員
対 応 者 安学区社協 寺尾会長、井村さん（専従者）

専従者は、歴代子育て世代のお母さん。子育てオープンスペースへの参加をきっかけに、フルタイムで働くことの難しいお母さんに常駐してもらっている、担い手確保の新しい視点をもらえる拠点です。

■ 地域みんなの夢を語り合ってきた拠点

寺尾会長：この拠点は、平成15・16年度にまちづくりプランを策定する前段階のワークショップのときに、「こんな拠点到したい」といって出てきた意見（下記※）をもとにできたんです。プランにも盛り込んであるが、誰でも気軽に來れて、コーヒーを飲みながら、情報交換をするような場になればと思っています。來やすくするためには、顔見知りが必要ということで、平成15年4月から専従者を置いています。

（※）拠点について出た意見（H14.11.25）

- ・ お互いが情報交換しながら住みよいまちづくりを進める拠点であってほしい。
- ・ 助け上手、助けられ上手な住民が育つような拠点
- ・ 地区の生活情報の発信基地となればよい 拠点がすべての問題のかけこみ寺になったらよい
- ・ 困った時に誰でも声を上げることのできる地域づくりに役立つ拠点
- ・ 区社協本部を小型にしたようなもの
- ・ 強力なリーダーシップを持つ人に事務所にてほしい。

【基本情報】

場所：安集会所2階（安佐南区相田4-3-32-9）

広さ：約50㎡

使用形態：広島市から地区社協が借りて、他団体にも開放

開設日：月～金曜 9：00～12：00

駐在要員：専従1名（有償）

経費：電気代、通信代で年10万円。常駐者への手当は1日2,000円

※ 安集会所は広島市の委託で社協が管理している。
会場貸し出し業務は事務局が担当。社協事務所、応接室、会議室は社協専用。

市社協：平成14年ですでに拠点について、地域の活動について、「こうなったらいいね」という夢を語り合っているのがいいですね。

■ 拠点到いつも決まった人がいるから寄ってもらいやすい

寺尾会長：ここの拠点で特徴的なのは、専従者に若干の手当を出しているところです。資金確保のため、体協や女性会などへの助成金をすべて半額にし、賛助会費の制度を作りました。

井村さん：私は朝9：00～12：00までで1日2000円と1か月に1回渉外費として3000円いただいています。

寺尾会長：専従者をおくことで、情報処理等の事務作業が正確にできるようになりました。ワークショップで意見が出たような拠点到しようということで、専従者の井村さんには、誰かが來たらお茶を一緒に飲むのも仕事、來た人には相手してあげてくれーよ、と言ってい



ます。拠点を作っても、どんな人がいるのか分からない場合は、気軽に行きにくいのではないのでしょうか。

井村さん：ここは人の出入りが結構あります。役員さんはもちろん、地域の人がウォーキングがてらトイレやお茶の休憩場所として寄ってくれたりしています。

森重さん：そういうことがあるのは、常駐の人がいるからこそですね。

丸山さん：古田学区では午前中、開設しています。

■ 専従者のターゲットは幼稚園の送り迎えをしているお母さんたち

寺尾会長：安の専従者は3代続けて30代の人になってくれています。ターゲットは、幼稚園の送り迎えしているお母さんたち。子どもを送った後に、井戸端会議している。はじめの人にも、「給料は余り出せんが、社協で働かんか。」と聞いたら働いてくれたんです。以後、そういう人たちが続けてやってくれています。

丸山さん：幼稚園に子どもを通わせているお母さんに声をかけたというのはいいアイデアですね。

井村さん：3代の専従者とも、子どもが同じ幼稚園に通っていました。その幼稚園には送迎がないので、幼稚園の開門の8:40に子どもを預けて、それから歩いて拠点に来たら9:00に間に合い、ちょうどいい。12:00に拠点を閉めて、それから家に帰って昼ごはん食べたら子どもを迎えに行く時間。空いた時間を有効利用できて、ちょうどいいんです。

市社協：井村さんがここの専従者になった経緯を教えてください。

井村さん：もとはここの1階の集会所で行われていた子育てサークルに子どもを通わせていました。2階に社協があり、そこに働いている人（2代目の専従者）がいることは知っていて、何度か話すうちに知り合いになりました。そのころ、周りに働いているお母さんが多くて、私も働きたいな、とは思っていたんですが、子どもを幼稚園に通わせながら働ける条件の求人がなかなかなくて、働けないでいたんです。そんな時、2代目の人に「どうやってこの仕事見つけたんですか？（冗談で）辞める時は私に譲ってくださいね〜。」と言っていたんです。そしたらほどなくして2代目の人が子どもの手が離れたのでフルタイムで働くことになり、私にバトンタッチしたわけです。そして3年前に専従者になりました。

丸山さん：うまくつながっていていますね。

森重さん：古田学区社協の拠点には、いつも丸山さんが午前中全くのボランティアで詰めてくれています。いくらか手当を出したいね、という話も出ているんですが、そのためには財源が必要でなかなか進んでいません。

■ 専従者が休みやすいよう 交代の人にも手当を

寺尾会長：井村さんに用事があって、拠点の留守番を他の人に頼む時は、出てくれる人に1時間400円（半日で1200円）を支払っています。この1時間400円というのは、過去に1回ボランティアバンクを有償でしたときに400円だったのと、放課後プレイスクールのボランティアも1時間400円としているため、それに合わせたんです。拠点を開設した以上、ここを留守にするわけにはいきません。子どもの病気や用事の時に井村さんが休めるように、去年から交代で来る人にも手当を出すようにしました。



手前左から時計回りに、古田学区社協の森重さん、安学区社協の寺尾会長、古田学区社協の丸山さん、安学区社協の井村さん。

丸山さん：すべてボランティアで、という今までのやり方が必ずしもいいというわけではないですもんね。環境も変わってきたし、地域での活動の在り方が当たり前ではなくなっています、特に若い人は。自分が社協に関わるようになったのは、もともとは青少協からです。が、だんだんと活動に引き込まれてしまいました。でもこれは、自分の生き方に反するものではないし、時間があるときにはやるという感じになっています。なかなか体力がついていきませんが。

■ 子どもを連れてきていい職場は魅力的

市社協：井村さんは夜の会議にも出るんですか？

井村さん：出ます。今は留守番させていますが、子どもが小さいときには連れて行っていました。この専従者になってよかったことは、夏休みなどは、ここに子どもを連れて来られることです。

寺尾会長：夏休みは子どもを連れてきて宿題させてもいいよ、ということは最初から言っているんです。

井村さん：お母さんの中には、子どもの夏休みがネックで働けない人が多いので、そこは助かってます。子どもは家で留守番させていても宿題はしないので、ここに来れば、少しはするし、集会所に出入りする人がかまってくれるのでありがたいです。

■ 専従者になったからこそ 見えてきた地域の活動

井村さん：この専従者になる前は、パソコンも素人で、ここに来てからやり始めました。ふれあいセンター便りを作っていますが、パソコンで困った時は、地域のパソコンに詳しい方に電話で聞いて教えてもらっています。社協の活動は幅広く、すべてを把握していないといけなから大変です。会長への送付物や連絡もここで受け、ここから会長に連絡するようになっていきます。

森重さん：会長の秘書的存在ですね。

井村さん：カッコよく言ってもらって（笑）

丸山さん：常駐でいるから一人に集約して、いろんな面で機能していますね。

井村さん：今、私は「地域」から手当をもらっていると思うと、緊張感がありますし、責任感も出ます。拠点にいと、人とのつながりを感じるようにもなりました。拠点の専従者になるまでは「社協ってなに？」という感じでした。でも、ここに来て、子どもの登下校の見守りをしてくれている、ジャンパーを着ている地域の皆さんへの目線も変わってきたし、距離も近くなったし、地域の人々が近く感じられるようになりました。他の仕事に比べれば、給料は少ないですが、他のメリットを考えれば、これほど魅力的なところはないと思います。子どもの手が離れ、私もフルタイムで働ける時が来るまで、続けていきたいと思っています。

■ ボランティアバンクの 事務局としても機能

寺尾会長：ここはいろんな団体の拠点でもあります。時には公衛協の事務局にもなる（笑）。社協だけでなく、他の団体のこともできる範囲で協力しています。ボランティアバンクの事務局でもあります。

森重さん：ボランティアバンクの活動は活発にありますか？

寺尾会長：件数はそんなに多くはないですが平成 26 年度は個人依頼が 18 件、幼稚園や学校関係の依頼が 8 件ありました。それ以外も含めると、156 件活動しました。

森重さん：ボランティアバンクの登録者は？

井村さん：ボランティアバンク「安らぎ会」に、64人が登録しています。

寺尾会長：「社協が保険料を支払ってくれるなら登録だけしておこう。」というような人も出てくるので、安学区社協では、保険料はボランティア個人が負担しています。自分でお金を払ってでもボランティアをする意欲のある人だけが登録しています。

市社協：ここで相談を受けてからの流れは？

井村さん：まずは安らぎ会の会長に連絡します。簡単なことなら、その町内会の運営委員に対応してもらいます。

森重さん：無償ですか？

寺尾会長：基本的には無償です。

井村さん：例えば木を切るときも、バサバサ切ってよいときはボランティアバンクで無償で対応し、剪定を要するような時は、ボランティアバンクに登録している本職の方を紹介しています。このときは有料です。草取りの依頼が多いんですが、草を入れる袋は依頼者に準備しておいてもらって、お金の動きがないように、ボランティアが身ひとつで行けるように、と依頼者には準備をお願いしています。

寺尾会長：お金をもらうと、それに見合う仕事をしないと・・・という気分になるしね。

■ これからも、誰でも来やすい 安らぎの場にしたい

井村さん：ここは人の出入りがあります。トイレだけ借りに来る人もいるし、ネコが入っていたこともあった(笑)。ネコでも気軽に来れる場です。

寺尾会長：拠点を作る当初から、人が来やすい場所にする決めていました。ちょっと寄ってお茶飲みながら、気軽に話ができる場になって、情報交換もスムーズにできています。

井村さん：ぷらーっと気軽に来れる場で、暇つぶしで来る人もいる。「ここなら叱られずに食べられる～」とお菓子を持って来る人もいました。そういった安らぎの場でもあります。これからもさらに内容を充実させていきたいと思っています。

(平成27年11月20日 取材)



拠点の事務所スペース



拠点の会議スペースと応接スペース

2名の常駐者で拠点を支え、誰もが寄れる情報発信基地に

西区 井口地区社協 活動拠点（井口集会所）

インタビュアー 河内地区社協（佐伯区） 山崎地域福祉推進委員

対 応 者 井口地区社協 東会長、楠地域福祉推進委員、青谷事務局員、赤尾事務局員

この拠点では、常に2名の専従者が事務作業をサポートしています。2名分の予算確保ができるのは、地域の理解があってこそ。事務局員に負担をかけないさりげない配慮も随所に見られ

■ 常駐者は地域の女性が2人でつとめています

東会長：拠点ができたのは、自分が会長になった昭和60年頃、それまでは公民館の職員が社協の手伝いをしていていました。その後、井口出張所のあとに社協事務所を置くことになってから、この場所になりました。常駐する事務局員として、当初、自分が所属していた体協テニス部の女性2人に手伝ってもらいました。以後、転勤などでやめる場合は、その人たちが次の人を紹介してくれ、今6代目くらいです。はじめの二人だけは自分が声掛けたが、それからはお任せしています。

青谷さん：私は井口体協でテニスを一緒にやっていた人から紹介を受け、今6年目。地区社協のことを中心にやっています。



後列右から時計回りに、井口地区社協の赤尾さん、楠さん、東会長、青谷さん、河内地区社協の山崎さん。
拠点スペースにて。

【基本情報】

場所：井口集会所1階（西区井口2丁目1-3）

広さ：事務所スペースは約6畳、倉庫は約10畳

使用形態：広島市から地区社協が借りて、他団体にも開放

開設日：火・木曜13:00～16:00

土曜10:00～12:00

駐在要員：専従2名（有償）

経費：借上げ使用料は免除だが、電気代、通信代として月8,000円程度かかっている

赤尾さん：私はかつてPTAの役員をしていたんですが、それも終わって数年経って、時間に余裕があったので、つながりのあった青谷さんが声をかけてくれて始めました。トールペイントの自宅教室もやっていて、主任児童委員もしています。

東会長：事務局員には「いつ休んでも、いつ辞めてもいい。」と言っているんです。一人だと荷が重いので二人体制にしています。

山崎さん：次から次へよく人が決まるもんですね。

青谷さん：紹介でつながっているんです。人のつながりで

東会長：事務局員は面接なし、条件なし、いつ辞めてもいいことにしています。

青谷さん：二人体制だと、どちらかに都合があってもどちらかが出ることができるので、週3回の拠点を開けなかったことはないですね。

山崎さん：決められた時間をオーバーすることはないんですか？

青谷さん：行事の後などはオーバーすることもあるが、ほとんどないです。

市社協：井口地区社協ではお二人に人件費を出しているんですよ。

楠さん：月3万円の人件費をそれぞれに出しています。青谷さん一人分は地区社協の会計から、赤尾さん一人分は集会所の収益から出しています。民芸保存会の事務局もしており、盆踊りや神楽などがあります。

■ 常駐者に負担をかけないためのまわりのさりげないサポート

市社協：これまで地区社協の事務局をされていて対応に困ったことはありますか？

青谷さん：困ったことはないです。苦情があったとしても私たち事務局には言われません。会長や地域福祉推進委員に苦情を言われているのだと思いますが。

山崎さん：拠点も広く、人材にも恵まれていますね。

東会長：人間関係は簡単にできるものではない。苦情を言ってくる人もいるが、それは良くしようという思いがあつてのこと。ありがたいと思うし、説明すると理解してくれます。

青谷さん：二人（会長と地域福祉推進委員）が私達の盾になってくれていると思います。そして、この地域に昔からいる人たちが、この地域を守ってくれていると思います。

東会長：二人とも奉仕でやってくれているのに、なんで他の人から不満を言われたいといけないんだ、と思います。渡しているのも給料というほどのものでもないし、謝礼程度。社協のことをしてもらって疲れさせるわけにはいきません。

楠さん：手当の「一人 月3万円」というのも、過去には1万円だったのです。でも、他の理事から、「1万円では安すぎるのではないか。」と言われ、経理的にも回りそうだったので、3万円になったんです。

山崎さん：みなさん楽しんでやっている感じが伝わってきます。ストレス溜まったりしません？

青谷さん：ストレスは溜まったりしないですね。

山崎さん：逆にここに来ることで発散になるね（笑）。

楠さん：事務局の二人には、夜の総会などの大きな会議には、負担になるだろうから出てもらっていません。資料の作成はしてもらっています。

■ 社協喫茶店？

取材中も、囲碁をする人、それを見る人、ふらっと立ち寄った人など、高齢男性の出入りが多く、誰かが来られると、事務局の方がコーヒーを出していらっやいました。

山崎さん：誰かが来たらコーヒーを出す「社協喫茶店」。

これは河内地区社協でも同じで、同じにおいがするわ。

楠さん：こういう気遣いができるのも女性だからこそだね。

山崎さん：ほんとチームワークが素晴らしい。



コーヒーを出す青谷さん。皆さんくつろいでいます。

■ ここは気楽に来れる情報発信基地 すべては人間関係があつてこそ

東会長：地区社協の活動は、人間関係があるから続いているようなものです。町は特別変わった町ではない。すべては人間関係。続けることが立派で、何か新しいことをすることばかりがいいことではない。伝統を守ること大切です。

楠さん：過去の経歴が立派な人でも、地域住民としてはみんな同じ。ここはみんな平等なのがいい。

東会長：過去に校長先生をしていても、それは関係ない。過去ではなく、地域に入るとみんな一住民。

市社協：井口地区社協にとってこの場所はどういう場所ですか？

東会長：皆さんの絆の場所！

楠さん：気楽に来れる情報発信基地。何か地域でやるということになれば、ここに情報が入る。いろんな団体との連携も取れます。

いざというとき思い出してもらえる拠点を目指して

南区 大河地区社協 活動拠点（大河集会所）「ボランティアバンクひまわり」

インタビュー 大塚・伴南学区社協（安佐南区） 茂木事務局長、守井さん（ボランティアバンク担当）
対 応 者 大河地区社協 森原会長、對尾地域福祉推進委員（兼 ボランティアコーディネーター）

この拠点はボランティア登録者が当番をしており、ボランティアバンクの事務局として機能しています。登録者は、個別支援のほか、地域活動の実践者としても活動しており、バンクとして、登録者が活躍できる工夫がされています。

■ ボランティア同士が仲良くなっているのが大前提

對尾さん：これまでも形だけはボランティアバンクがあったんですが、活動が進んでいなかったもので、平成15・16年度に福祉のまちづくりプランをつくったときに、「ボランティアバンクを何とかしよう」となったんです。そこで「ボランティア登録者に目的がないと！」ということで、約100人が参加する健康教室の時に、炊き出しの練習も兼ねて、豚汁とおにぎりを作って、みんなであったかいものを食べよう！というのが、ボランティアバンクの最初の活動。ボランティアが集まって、一緒に何かしないとね。まずボランティア同士が仲良くなることが大前提。活動を地域の方に知ってもらうため、ボランティアバンクの広報紙を年4回、全戸配布で発行しました（今は年2回発行。）

■ 登録者の活躍の場が多い ボランティアバンクになっています

對尾さん：登録者の年間の活動としては、施設の祭りに参加してポテトを売ったり、とんどでのおにぎり作り、サロンの手伝いなど。行事に参加することで、ボランティア登録者は年1回以上は活動しています。楽しみながら活動していますね。

守井さん：大塚・伴南学区では65人が登録しているが、3年間で1度も活動していない方がほとんどです。

茂木さん：行事へ登録者に参加してもらうというのは、いいアイデアですね。

【基本情報】

場所：大河集会所2階（南区旭1-14-12）

広さ：7畳

使用形態：広島市から地区社協が借りて、もっぱら社協で使用

開設日：月曜11：00～12：00

駐在要員：ボランティアバンク登録者35名で当番制

経費：経費負担なし



對尾さん：ボランティアが一堂に集まることはありますか？

守井さん：ボランティアバンクを立ち上げたはじめの勉強会くらいしかないんです。

對尾さん：大河では、拠点（ボランティアバンクの事務所）の当番をボランティア登録者が交代でやっています。3か月に1度、ボランティア登録者の交流会をし、3か月先までの拠点の当番をみんなで決めます。週1回、1時間しか拠点を開けていませんが、当番をするなかで、ボランティア同士が仲良くなり、気持ちを通わせます。年1回は懇親会もしています。

茂木さん：大塚・伴南では、依頼には、原則、その町内会のボランティアが対応することにしています。

對尾さん：大河では、町内会に関わらず、行けるボランティアが行く。それぞれに、何をするのが好き、というのがあります。例えば、草取り隊、障子貼り隊、縫物隊など。行事の手伝いはこれに関係なく、行ける人が行くようにしています。



左から、大塚・伴南学区社協の守井さん、茂木さん、大河地区社協の對尾さん、森原会長

茂木さん：有償ボランティアという話もありますが、大河地区ではどうですか？

對尾さん：していません。ボランティアで有償というのは、私は考えられないんです。そういった依頼はシルバー人材センターを紹介しています。

守井さん：ただじゃ、頼みにくいという声もありますね。

對尾さん：どうしても、とお礼をしてくれる人がいますが、そういったときは一旦受け取って、社協に寄付しています。

茂木さん：大塚・伴南でもこれまでに謝礼を出されたケースが2件あり、地区社協の善意銀行に寄付しました。

■ 依頼を受けて「つなぐ」コーディネーターの役割

對尾さん：拠点で相談を受けたら、すべて私に連絡が入り、詳しく話を聞いたり、ボランティアを調整したりは、私がコーディネーターとしてやっています。10年近くも3か月に1回会っていたら、仲良くなるし、自然とボランティアのこともよくわかるようになっていきます。

市社協：新たなボランティアの登録はありますか？

對尾さん：ほとんどないが、あて職で登録してもらってもうまくいかないんです。

茂木さん：うちは男性の登録者が多いです。拠点の当番も、私が週2回、あとの1回は町内会が交代で詰めています。登録者に当番をやってもらうというのは、いい方法だと思いました。

■ 頼られ、思い出してもらえる場所でありたい

森原会長：大河地区には2400～2500人の高齢者がいますが、その人たちが安心して、元気で笑顔で暮らせることを目指して、拠点は、頼られる場所でありたいと思います。そういう場所だということを、どう人に伝えたらよいか、今考えているところです。ここがシャッター通りにあり、「ちょっと寄って」というような場所ではないので、どう絆を作っていくか苦労しています。高齢者をどう守るか、笑顔を作ってもらうかがテーマですね。

對尾さん：ここを立ち上げた時、ある高齢者から「やめちゃいけんよ。いざという時になったら、そこに電話すりゃいいんよね。」と言われたんです。そんな風に、いざという時に思い出して、安心感を持ってもらえればいいなと思っています。普段、依頼は少なくとも、「いざとなったらボランティアバンクがなんとかしてくれる。」と思ってもらえているというので十分かなと思います。

依頼がないのは、生活が落ち着いていると考えて、本当に困った時に安心感がある拠点でありたいですね。どうしてもという時は、地域包括支援センターや、どこからか話は回ってきます。一時期、ボランティアバンクをやめようか、という話もあったんですが、「私が年取った時、行くところがないけえ、やめちゃいけんよ。」と言われたので、まだやめずに続けています。ああしないと、こうしないと、とあんまり思わずに、ここを思い出してくれる人が何人かいる、ということでもいいと思っています。

茂木さん：便りがいい知らせ、と昔から言いますし、地域包括支援センターから依頼があるということはそれだけ認められているということですね。

守井さん：依頼が少なくても、助けあえているのかもしれないし、あれこれ考えなくてもいいのかもしれないですね。

森原会長：絆をどうするか、がこれからのキーワードになりますね。

民間会社の空きスペースを活用した拠点をサロンや会議に活用

中区 神崎学区社協活動拠点（神崎ふれあいホール）

インタビュアー 上温品地区社協（東区） 大藤会長、鋤田事務局長
対 応 者 神崎学区社協 江郷事務局長（兼 地域福祉推進委員）

民間会社の空きスペースを活用している点では、広島市域では数少ない拠点です。社協関係者の所有のスペースではありますが、多くの団体が活用しています。拠点で行われているサロンの運営方法の工夫は参考になります。

【基本情報】

場所：江郷ビル2階（中区舟入本町11-4）

広さ：約66㎡

使用形態：個人から社協が借りて、他団体にも開放。

開設日：月・水・金曜 10:00～11:30

駐在要員：輪番制（地域福祉推進委員や民生委員）

経費：水光熱費等含め、年30,000円。

■ 民間会社の空きスペースを利用して拠点を開設

江郷さん：神崎には古くからの人が多く、月1回、社協と各種団体、小学校、保育園などが一堂に集まる団体長会議を行っています。その会議にはみんなが集まっているので、何かあればすぐその場で即決できるいい点があります。その場で決まったことは各所属（団体等）に持ち帰り、各所属で話し合う。ちょっとした頼みごとなら、役員さん個人で動いてくださったりして融通がきくことも多いが、そのぶん、こちらも学区に恩返ししています。そういった精神が学区に浸透していると思う。「住んでよかった神崎」をスローガンにしています。

鋤田さん：この拠点はいつからですか？

江郷さん：この拠点は平成23年に立ち上げました。それまでは別の場所を使っていたんですが、当時は有料だったし、地区の端っこにあり不便だったんです。私は民生委員もやっていますが、見守りが必要な高齢者は、言ってくるけれどわかりません。この地域は高齢者も多いので、何とかしないといけないな、と思っていましたところ、自分の会社が事業縮小により、一部、会社のスペースが空きました。ここなら10～15人は集まれるし、場所代もかからないので、ということで、ここに拠点を開設しました。（拠点と会社とはパーティションで区切られている。）パーティションの向こ



左から、上温品学区社協 鋤田さん、大藤会長

神崎学区社協 江郷さん

う側は私の会社なので、午前中は私がだいたいいますし、月・水・金曜日の10:00～11:30は民生委員や女性会などが交代でいてくれています。経費は、年3万円の地区社協活動拠点整備事業助成金でやっています。

大藤会長：ここは今でもパーティションの向こう側は会社があるんですね。

江郷さん：たまたまこの拠点は会社を縮小したのでできました。もちろんテナントとして貸すこともできたんですが、借りる人もいないだろうし、それより地域の人に来て、わいわい言って遊んでもらうのがいいと思ったんです。本来なら1階の方がいいんですがね。エレ

ベーターはさすがにない。開設当初は、妻が「あなたがいないときの鍵の不安がある」と言っていましたが、自分がいないときでもわかるようにしたので、それも解決しました。

鋤田さん：社協の備品と言えるものはどれですか？

江郷さん：平成23年度の地域支え合い体制づくり事業で階段に手すりをつけてもらったり、エアコンを設置したり、会社との仕切りのパーテーションを作ったりしました。あの助成金は申請まで期間が短く、エアコンはよく検討できずに購入してしまったので、拠点の広さに比べて小さいものになってしまいました。今はスクリーンがほしいですね。私物を使っているんですが、ガタがきています。

鋤田さん：上温品もあの助成金で書類棚などいろんな備品を揃えました。あの助成金をうまく使った地区とそうでない地区がありますね。地区の備品は他団体にも貸出しています。

江郷さん：神崎では備品の貸出しはしていないんですが、他の団体の会議などはここを使ってもらい、場所の提供をしています。

鋤田さん：うちは福祉センターの中にあり、お風呂もあるので、お風呂に来た人が話をして帰るといふようなこともあります。この拠点で会議をしたりもするんですか？

江郷さん：2か月に1回の学区社協の役員会はここです。福祉委員制度の話を進めたいんですが、なかなかすんなりいきません。町内会長が変われば考え方も変わるかもしれませんが。

■ 男性の参加を増やすことや財源確保には工夫と努力が必要

江郷さん：ここでは、月に1回のサロンをやっており、「縁側の体操」という椅子に座ったままできる体操や、歌声喫茶のような「縁側の歌」というサロンが好評ですね。民生委員の訪問の時などに、一人暮らしの高齢者にチラシを配っていて、1回100円です。他の地区の人や神崎学区の中でもかなり遠いところから来られる人もいます。でも、それは拒まず一緒に遊んでいます。サロンで困っているのは、サロンは女性ばかりで男性が行きにくいということですね。麻雀でもすれ



ちょっとした会議やサロンなどには十分なスペースです。

ば違うのかもしれませんが……。自分は、これまで子ども会をやっていたり、今は社協の活動をやっているのですが、女性の中で活動することに免疫ができていますが、ずっと会社勤めをしていて地域との関わりのなかった男性は、入りにくいでしょうね。そのため、子ども会の時から、お父さんを意識的に引っ張りだすようにしていたんです。

大藤会長：確かにサロンは男性の参加は少ないですね。

江郷さん：ここでのサロンは立地的に学区内でも2号線から南の人を対象にしています。北側の人から、なんであっちばかりという声もありますが、そういう声が出ないとこっちも張り合いがないですね。それぞれのサロンの担当者の会議を開いて競争するくらいでないとと思うんです。もちろん、動けばお金がかかる、そのためには賛助会員集めを頑張っています。賛助会員は、神崎は中区内ではトップです。

■ 拠点やサロンは、集まる人の考えや意見で進める

江郷さん：この拠点は、拠点に集まる人の考えや意見で進めているんです。ぼくらは口出ししないようにしています。そこがこの拠点のいいところだと思っています。拠点にしてもサロンにしても、将来的に参加者もお客さんじゃなく担い手として関わってもらいたいし、今後、長く活動を続けていくためにも、なるべくお金をかけず、関係者みんなで作っていきたいと考えています。

拠点で開催される総務会で強いつながりをつくる

南区 楠那学区社協 活動拠点（楠那公民館1階 研修室3）

インタビュアー 山田地区社協（西区） 定丸事務局長、坂手さん（事務局）
対 応 者 楠那学区社協 加藤会長、西角地域福祉推進委員、菅副会長

ここは、公民館の決まった一室を毎週1回、借りる形で拠点を開設しています。拠点で開設される「総務会」や、その他の「楽しみながらの活動」を通して、地区社協や民児協、他団体とのよい関係を築いています。

【基本情報】

場所：楠那公民館1階 研修室（南区楠那町7-10）

使用形態：その都度、公民館に使用申請している

開設日：月曜 10:00～11:30

駐在要員：5つの町内会で輪番制

経費：不要

■ その都度、公民館に使用申請する 拠点で、「福祉相談室」を開設

加藤会長：楠那は拠点の活動を「福祉相談室」と呼んで、毎週月曜日の10:00～11:30に開けています。携帯電話で相談を受ける体制になっていますが、残念ながらかかってこないのが実態。拠点の当番は5つの町内会で輪番で回しており、5週間に1回、当番が回ってきます。今日は丹那町町内会が当番だったので、菅さんが来てくれます。

当番は公民館に部屋とロッカーの鍵を借りに行き、拠点である楠那公民館1階研修室のドアを開け、「福祉相談室」の看板を貼り出して準備をします。

市社協：ここは毎回、公民館を借りる形なんですか？

加藤会長：毎回この部屋を借りることになっていて、その都度、申請書を書いています。申請手続きは、3ヶ月前から申請できる他の団体と同様に、その都度、行っています。

市社協：使用料は？

加藤会長：地域の団体なのでかかりません。社協の資料も一部、公民館に置くこともあります。相談は携帯電話で受け、福祉相談室の時間だけ電源を入れています。



左から、楠那学区社協の加藤会長、山田地区社協の坂手さん、定丸さん、楠那学区社協の菅さん、西角さん

市社協：福祉相談室の当番には町内会長がだいたい来られるんですか？

菅さん：町内会長と副会長が多いですね。

加藤会長：電話がかかってこないで、事務をしたり読書をしたりすることもあります。でもそれもいいと思っています。自分も月曜日はちょっと顔を出すようにしています。そこでまたしゃべっているんです。

市社協：それがちょっとした打合せの場にもなりますね。



拠点にて、インタビューの様子

■ 地区社協一民生委員一町内会の強い つながりでアイデアあふれる活動

加藤会長：9月には75歳以上の一人暮らしの方を対象にした、「ふれあいサロンくすな」を開いています。主催は社協ですが、実際に動くのは民生委員。10月にはふれあいコンサートをして、五日市の吹奏楽団に演奏してもらっています。楠那中学校の吹奏楽部やママさんコーラスとコラボしたこともあるんです。ともども社協が主催ですが、実際動くのは青少協やおやじクラブ。社協は年寄りが多いので、「口は出さないから。」と言ってやってもらっています。が、実際は口も出している（笑）。小学生3～4年生を対象にした史跡めぐりも社協が主催です。そのときに使う地図は、右を開いて地図を見るときは、左側にその説明が来るように編集されているので、全部開かなくても見られるようになっていきます。

定丸さん・坂手さん：いいですねえ。

加藤会長：これは、社協だけではお金がないので、公民館も一緒にやっています。子どもたちにはふるさとを十分知ってもらって、よそに行っても話ができるようになってもらいたい。地域のことを知っていることで愛着も湧くし、大きくなっても楠那にぜひ帰ってきてもらいたいんです。あと、体協主催にはなりますが、中学校の運動会と地域の運動会を合同でやっています。

西角さん：福祉相談室を喫茶店にしようか、という話も出ていたんです。いつでもお茶を飲みにおいで、という感じで。しかし、お金をとるのかとか、人が来るのかという問題があって、進んでいませんが・・・。

南区社協：楠那はアイデアマンが多いんです。避難所の宿

泊訓練も自主的にされていました。実際に寝泊まりしてみても、わかることもある。トイレの問題や、雑魚寝してみても生活スペースの確保について考えることもできます。

西角さん：避難したらこういうことをする、というのは宿泊の前段でやっています。その後、宿泊をしています。

■ 「総務会」で方向性を検討

加藤会長：毎月第1木曜日18：00～社協の会長と副会長、会計、地域福祉推進委員で定例の「総務会」をしています。ここでスケジュールの確認やお願いごと、今の時期だと赤い羽根の共同募金について話し合い等をしています。何か言ったらすぐに総務会で話が決まる。楠那は5つの町内会長全員が社協の副会長になっているので、ツーカーの仲、阿吽の呼吸で非常にやりやすい。

坂手さん：それはいいですね。

加藤会長：自分が社協の会長と民児協の会長をしているからできるのかもしれないが、社協と民生委員の関係はいいと思います。民生委員に金はないが、行動力はある。よく動いてくれるし、自分が退任してもこういう関係が続かないといけません。

■ 地域の活動は、飲みながら 楽しみながら、段取りよく

市社協：お話を聞いていると、町内会同士の関係性がよく、
社協会長と副会長の信頼関係が強い印象を受けます。

坂手さん：総務会のメンバーの関係性の心地よさが感じられますね。

加藤会長：私は飲むことが好きで、民生委員のOBとの飲み会や、黄金山周辺の4つの地区社協で集まって飲んだり、黄金山の文化を語る会という、飲み会もやっています。文化と言うと美しく聞こえるでしょ。楽しみながらやらないと、どっかに楽しみがないとね。

菅さん：そうでないと、私たちもついていけないですね。

加藤会長：段取りがうまくいけば、あとはうまくいく。

西角さん：普段の集まりは、町内会ごとになりがちですが、ちょっと飲んだりすることでいろんな人と話ができます。それがいいですね。

（平成27年11月16日 取材）

「地域おこし」から「福祉のまちづくり」の実現を目指す

安佐北区 狩留家地区社協活動拠点（狩留家集会所）

インタビューー 安北学区社協（安佐南区） 乗藤事務局長（兼 地域福祉推進委員）
対 応 者 狩留家地区社協 黒川章男会長、黒川俊子地域福祉推進委員

ここは、3つの活動の「共同の拠点」として、毎日のようにさまざまな団体が活用している拠点です。地域に合った活用の仕方をしてもらえる点は参考になります。

■ 3つの活動の拠点として機能

黒川会長：狩留家地区社協の方針を「地域おこしをすることで福祉の町づくりを実現する」にしました。狩留家地区社協の力だけでは狩留家の町おこしは難しい。そこで、①地区社協を中心に、②「NPO 狩留家」（狩留家町内の経済活動が出来る仕組みを創り、“狩留家なす”の販売や有償での草刈ボランティア等をする）、③てくてく中郡古道プロジェクト（地域全体の向上を目指すため、狩留家近隣地域の各郷土史研究会で結成）の3つの活動の共同の拠点として、さらに必要に応じて結成される様々な活動の会議場所として使用しています。

乗藤さん：私も「福祉のまちづくり」以前に、「まちづくり」をしないといけないと思っています。

■ 常駐者、無償のボランティアなど、取り組んではみたが・・・

黒川会長：前会長がボランティアバンクを作り、社協理事が交代で拠点の電話当番をしたこともあったんですが、全く電話がかかってこなかったんです。それでも1年間、“かるがボランティアバンク”を実動させた、駐在していることを広報したりして頑張ったんですが、結局、理事の皆様が無駄な時間を費やされたことで終わってしまいました。今でもバンクは存続させていますが、1年間に数回の要請があるかないかの状態です。

そこで住民アンケートをとったら、有償の方が頼みやすいということがわかり、有償ボランティアをす

【基本情報】

場所：狩留家集会所1階（安佐北区狩留家町3144）

広さ：29.16㎡

使用形態：集会所の一部を他団体が借り、地区社協も使用している

開設日：月～日曜

駐在要員：そのときの行事や会議の責任者

経費：借上げ使用料は免除だが、電気代、通信代として月5,000円程度かかっている



左から、安北学区社協の乗藤さん、狩留家地区社協の黒川俊子さん、黒川章男会長

ることをメインの目的にNPO 狩留家を立ち上げました。NPO 狩留家で、有償で休耕地の草刈りをすることにしたら、依頼が入ってくるようになりました。無償のときも草刈りのメニューはあったのですが、無償では依頼がなくて、有償にした時の方が依頼があるのです。

乗藤さん：田舎のほうの話だと、皆さん、だいたい畑をやっておられて、忙しい時は1～2時間家をあけることも難しいと言いますよね。畑仕事から離れ、拠点で拘束するからにはお金を払わないといけないというのは、他でも聞いたことがあります。

乗藤さん：ボランティアバンクが、無償では頼みにくいのは、どこの地域も同じですね。無償だと気が引けるので、お菓子やビールなどを用意することになって、そっちの方が高つく。それなら1時間500円とか決めてくれておいた方が、頼みやすいということです。安北も依頼が少ないです。200人もボランティア登録していますが、プールの監視員などの、高齢のボランティアではできない依頼もあります。最終的には、地域住民全員がボランティアになって、隣の洗濯物が取り込まれているかや、電気がついたかを見たりするような地域になればいいと思います。

黒川俊子さん：他には、月1回、拠点に地域包括支援センターの職員に来てもらって出張相談をしてもらうという企画をしたんです。これもいい企画だと思ったのに、これも相談者が極めて少なく、1年でやめることになりました。遠くの地域包括支援センターにはわざわざ相談に行くのに、近くの集会所で相談を受けることができて来ない。相談も地域の人に聞かれるわけではないのに、拠点に相談に行く、ということが他の住民に見られたりして、噂されるのを心配して、逆に近いからこそ嫌なのかなと思いました。

■ 拠点に常駐者を置くより どのくらい活用されているか

黒川会長：この拠点は、行事や会議などで月平均20日以上は使っています。拠点は、常駐者を置くことより、毎日使っていることも大切。事務作業は、拠点より家の方が楽。横にもなれるし、パジャマででもできるし。

乗藤さん：しっかり動いている地区は、事務を自宅でも問題ないと思うが、そうでない地区は自宅にこも



NPO狩留家で設置した水車小屋第1号

ってやるのはよくないと思いますね。

黒川会長：事務のとり方や常駐者の置き方はそれぞれの地区で考えればいいが、常駐者を置くというやり方は狩留家には合わない。常に人が常駐して相談ができる体制が必ずしもこの地域にとってよいわけではないと思います。狩留家には人を置くパワーもないし。

■ 人が集まり 情報が持ち寄られる場所

黒川会長：この拠点に情報が集まり、発信するというのではなく、ここはみんなが情報を持ち寄って、ここでひとつのストーリーができて、方向性を決めて発信する基地がこの拠点です。誰かが常駐しながら情報収集・発信するのではなく、情報を集めてきてここで会議して、その結果を町内に情報を発信しています。ここは情報の発信基地としての役割をしています。

黒川俊子さん：情報を広めることは大切にしています。新聞やテレビ、回覧などは丁寧にしていますよ。

乗藤さん：安北では、ホームページなどで情報発信をしています。（実際に見てみる）

黒川会長：パソコンや機械に詳しい人が狩留家には限られているのがネック。人口の大きい町にはいろんな能力を持つ人がいるのがすごいですね。

■ 地域の資源を再発掘し、活用する

黒川会長：最近では、ここ30年位途絶えていた伝統芸能のシャギリを復活させました。「地域おこしは歴史から」と思います。地域おこしは、新しい団地や事業所をつくることばかりではない。古くから地域に潜在している資源を再発掘して、有効活用するのでもいいと思っています。“郷土史志”を見ていたら、森の中に、名勝と呼ばれる大きな岩があることが分かり、住民で森を歩いて探し出し、周りの木々を伐採し、岩にしめ縄などをつけて、観光地と言うほどではないが、名勝の一つとして蘇らせた。眠っているものを再発掘し、ブラッシュアップし、新たなものにする、そういうことを蓄積していきたいですね。

子育て支援で地域が変わる、その活動拠点になっています

安芸区 阿戸地区社協 活動拠点（阿戸福祉センター）

インタビュー 中島地区社協（中区） 谷保地域福祉推進委員

対 応 者 阿戸地区社協 松田会長、京才ボランティアコーディネーター

拠点には、それぞれの部会のメンバーが次々にやってきて、活動されています。高齢化の進む地域だからこそ、子育てに力を入れる。その活動の発信源になっています。

■ 常駐ではなく、それぞれの部会が拠点で事務作業をしています

松田会長：過去には事務局員として年50万円で毎日拠点に来てもらっていました。でも、平成23年に地区社協のコスト削減のため、その方には辞めてもらって、地区社協を5つの部会制（広報部会、地域福祉部会、高齢者・ボランティア部会、児童・障がい児者部会、総合（事務局））にしました。それぞれの活動は、それぞれの部会で責任を持ってやってもらうことにし、部会に予算配分をするようにしました。そのため、それぞれの部会が事務処理のためにここに来て、入れ替わり立ち代わりで作業をしています。阿戸福祉センターの職員とも支え合ってやっています。事務局を一人置いて、部会と調整をしながら進めるのが理想ですが、常時来てもらえる人がいません。今は何をするにしても部会の事務員に集まってもらっています。常駐者を



窓には「ようこそ阿戸地区社協へ」とあります。
協議机、事務用品など作業しやすい空間です。

【基本情報】

場所：阿戸福祉センター（安芸区阿戸町6038）

使用形態：地区社協で借りてもっぱら地区社協が使用

開設日：月・水～土曜 9：00～17：00

駐在要員：適宜（事務局・施設管理職員）

経費：借上げ使用量は免除。共益費5,000円

置くとなると有償にしないといけないし、最近は寄付も減っているので、今はできません。でも今後、福祉委員をやろうという時には、多少、有償も考えないといけないとは思っています。

谷保さん：中島地区も福祉委員を置いていますが、すべて無償です。

京才さん：私はボランティアコーディネーターをしていますが、見守りが必要な相談があった時には、ボランテ

■ 歴史ある「ほことり会」の活動

シアグループ「ほことり会」につながことがあります。会のメンバーは13名で、2か月に1度、「ほことり」という手書きの広報紙を、直接渡しています。一人暮らししか二人暮らしの高齢者が対象で、各町内のメンバーがそれぞれ担当しています。活動に30年の歴史があるので、ほことり会のメンバーが今後、福祉委員になってもらえたらという話もしています。

谷保さん：広報紙が手書きなのがいいですね。

京才さん：今、202号まで発行されています。手ぶらでは行きにくいし、話のきっかけになります。目の不自由な人には読み上げたりして、喜んでもらっています。ここは田舎なので、ちょっと奥になると誰も訪ねてきませんので、訪問するとすごく喜んでくれますよ。

松田会長：いろいろな見守りのやり方がありますが、コミュニケーションの大切さを感じています。座りこんで

30分話すのと、物を渡すだけで終わるのとでは、心が通ったものになるか物だけの処理になるかで全然違います。中島地区も見守り活動をしていますか？

谷保さん：近隣ミニネットが充実している町内会では、協力さんが見渡せる位の範囲で、電気や新聞受けなどを見るさりげない見守りをしています。まずは挨拶からはじめて、徐々に相手から声をかけてもらえるような関係になればいいと思っています。

京才さん：定期的に見守りをしていると、訪問した時「ちょうどよかった、このフタ開けて」とか言われます。

谷保さん：そうそう、「湿布貼って。」と言われることもあります。見守りの必要な人は、町内会長や民生委員につなげています。

■ 子どもを大切にすることで地域に動きが出る

松田会長：これまで社協の活動はとかく高齢者に偏っていました。でも、子育て世帯や子どもも大切にしたいと思い、少しずつシフトしています。阿戸認定こども園ができたことに合わせ、社協の活動も子どもの活動をするようになりました。子どもたちとの交流や行事をしているので、子育てしやすいまちになればと思います。社協は高齢者対策と思われませんが、高齢者と子どもはセット。町ぐるみの教育協議会を作り、0歳～15歳までは地域で大切に育てていこうとしています。小学校、中学校も盛り上がっています。最近、この拠点の裏に、新しい団地ができ、急激に子どもが増えました。空き家が増えても、若い夫婦や、子どものいる世帯に入ってもらいたいですね。年寄りの住みよい町でもあり、子どもが住みよい町にしないと。

谷保さん：長いスパンでみると、そういう子どもたちが地域の担い手になっていくことが考えられますね。

■ 変わってきていると実感できることが活動につながる

松田会長：阿戸をこれから先どうするのか、「阿戸地区あらたなまちづくりプランの作成に向けたワークショップ」をこれまで8回しています。安芸区地域おこし推進課と連合町内会が中心になって、閉鎖した保育園の跡地の有効活用についてのワークショップをする



左から、中島地区社協の谷保さん、阿戸地区社協の京才さん、松田会長

んですが、農産物の直売所、住民がお茶を飲めるサロンカフェ、子育て中のお母さんの集いの場、園庭の活用など、いろいろアイデアが出てきています。できるところから取り組みたいですね。新しい人に新しい目であとに働きに来られている人からも意見をもらっています。阿戸には阿戸の資源がある。長く阿戸にいる僕らには当たり前すぎてわからないけど、外の人や若い人を見ると新鮮に見えることもあるようです。若い人は見る角度が違います。みんなが夢を語り、阿戸をよくしようと言ってもらえるだけでうれしいし、それが形になると、阿戸の町が元気になります。阿戸に子ども園ができたのも、住民の熱意でできたんです。待機児童ができてから要望したのではなく、阿戸はもっと早くから取り組んで要望していたんです。

都会のほうは、何もしなくても人が集まりますが、こういう地域は、地域が頑張らないと人が来ません。何もしないと高齢者ばかりになります。誰もやってくれないなら、阿戸の者でやろうという気になります。阿戸は住みやすい町、不便なのは交通の便だけ（笑）。今後、人口が増えるわけではないと思いますが、多少減っても本当に豊かな生活ができればいいと思っています。理想を言うばかりではダメですが、少しずつ変わってきているので、地域の人にも楽しみにしてもらっています。皆、阿戸が変わってきている実感を持っていると思いますね。

谷保さん：高齢者と子どもはセットという考え方は大変参考になりました。また、皆さんが育てた野菜も付加価値がついて、他地域から阿戸の野菜を食べに行きたいな、おいしいご飯を食べに行こう、などになればいいですね。（平成27年12月 4日 取材）